
妖カフェ

鶲鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖力フェ

【Zコード】

Z3809Z

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

裏と表じゃ性格が全然違う少女、響。 だけどある日、学校の帰り。 とても素敵なカフェを見つけて…。

登場人物

麗亞
れいあ
響
ひびき

高校1年生の女の子。

表明るくて優しくて元氣で誰にでも優しくてよく笑う。
裏臆病で強がりで弱虫で泣き虫。

他人と関わるのが本当は苦手。

両親とも、うまく行っていない。

天城
あまぎ
雲
しもく

高校2年生の男の子。

明るくて優しくて元氣で鈍感。

妖の血を引く。

『華陽』というカフェで仕事をしている。
響と一緒に学校で喋った事は一度も無い。

松田
まつだ
飛樹
ひき

高校1年生の男の子。

無口で暗くて冷たくて本当は親切で優しい。
妖の血を引く。

『華陽』というカフェで仕事をしている。
響と一緒にクラスで一度も喋った事が無い。

皋月
さつき
露依
れい

20歳くらいの男の子。

明るくて元気だけビチャラくて女つたらし。
妖の血を引く。

『華陽』というカフェの店長。

女つたらしの達人？

鬼河
おにかわ
臨
りん

高校1年生の男の子。

生意気でちょい冷たいけど照れ屋。

妖の血を引く。

小さい頃の記憶が無い。

『華陽』というカフェで仕事をしている。

1杯 始まりのカフュ

「麗亜！バイバイ！また明日ね！」二コッ

「うん！バイバイ」二コッ

麗亜
れいあひびき
響それが私の名前。

だけど皆、”麗亜”って言つ。

チャリンッ

「！？…。」

鈴の音が聞こえる。

「にやー。」

黒い猫が響を見ていた。

黒猫は走り出す。

「待つて！？。」

響は黒猫を追つた。

そして、ある一つの道に来た。

「静かな場所…甘い匂い？」

チャリンッ

「あつ！待つて！」

とその時…

ドンッ！…！

「えつ！？」

「痛ッ！…！」

響の頭がドアとぶつかつた。

「大丈夫？君、ごめんね！」

「大丈夫です…。」二コッ

「お店に入つて、休む？」

「…あつえつと…いたたたたた。」

「じめんね、まあ、寄つて行つてよ」一一口ッ

「はあ…分かりました。」

響はお店の男らしき人とお店に入る。

「まだ、開店前だけぞ。」一一口ッ
カラソシ

「店長、どうかしたんですか？」

「…誰ですか、その人？」

「あつ…扉を開ける際にぶつかって、怪我をせりやつて、ちょっと
お店で休まそうつて。」一一口ッ

「う…たたたたた。」

響は店にあるソファーに座る。

「本当にごめんね、大丈夫？」

「は…じ心配なく、大分マシになつてきたので…。」一一口ッ

「そうだ、俺はこの”華陽”というカフュの店長の

臯月露依よろしくね」一一口ッ

「あつ、私は、麗亞響と申します！」一一口ッ

響は慌てて、自己紹介をする。

「響ちゃんか、可愛い名前だね」一一口ッ

「そうですか？ありがとうございます」一一口ッ

「出たよ、露依さんの色氣モード。」

「ほつとけば治るだるう？」

「……。」

「何？何？俺をそんな顔で見つめない。」

露依は店の人には信頼されている。

「私、もう帰ります。いろいろすみませんでした。」

「…。」

響が帰らうとする。

響ちゃん！

「はい？ なんですか？」

露衣が響引上かる。

二十一

卷二

卷之三

露依カ響に抱きいく

店長！」

「めん、めん、可愛すぎてつい抱きついたわ～」ニッ

「…あつえつと…失礼しました！」ペコリツ

響は慌てて店から出て行つた。

「西郎、どうする気ですか？」

「あの子にちょっと興味がわいたんだよ」——コジ

：悪い癖

「おもてなし」の歴史

ハレ
て
た
?

「当たり前ですよ！」

そして、店長は生徒手帳を出した。

店長の?

「響ちゃんのだよ、えつと皆、同じ高校だよね？響ちゃんも同じだ

から

明日の放課後、ここに連れてきてくれないかな?」――コジ

向してくれる!」

卷之三

卷之三

あ 連れできてく わから 韶子 へ 仕て 炊因 も 行き立つ

「アーティスト」

「…何か、楽しそうなカフェだったなあ～」二コッ

2杯 アルバイト決定？ 1

そして、気ままに次の日がやつてきた。

「じゃあ…行つて来ます。」

ガチャツ

響は家を出た。

そして、ポストの中身を見た。

「ん？…。」

赤い封筒が入つていた。

中身を見てみると。

『麗亜響様へ

昨日は何かとごめんね！－

今日もまたカフェに来てくれると嬉しいな！

皇月露依より。』

「露依さんから？今日もカフェに…どうしよう？」
響は手紙をかばんに入れて、気ままに歩いていた。

「麗亜！おはよー！－」

「おはよー！－」二コツ

響はいつもより、とても明るかった。

「あれ？生徒手帳がない！－」

「麗亜、それはまずくない？この私立学園は生徒手帳が無いと入れないよお～どうする？」

「どうしようつ…。」

響はかばんをあさる。

「はあ…ないよ。」

「なあなあ、麗亜響つて知つてる？』

「響一出て来いよーーー！」

「！？」

۱۰۷

「おお！ ナイス！ 飛樹！」

響の前には昨日、カフェに居た人達だつた。

「えつと。

「ほれ、生徒手帳。」

六
：

…暗黙の了解でた

「別に、たいしたことはしてないからな！！」

「臨、顔真つ赤。」

何！

卷之三

四

響に生徒手帳を手にしてかはんを持って学園に入る

卷之三

10

ガシャンッ！！！！

ピクッ！

— ! ? : —

1

「どうかしたのか？」
「」

いや：なんでもない！」

あいつ、今物音だけしだけなのに、何あんなに怯えているんだ？

そして、放課後。

三人トリオは、学園の外で響を待っていた。

「……何で飛機も臨もケニア違へんたよ……」

「 知る力 作り聞く力 」

「それこしても、屋一な
響。」

響は教室に居た。

自分の席で窓から空を見上げていた

०

響はかばんを持つて、教室を出た。

そして、響が門を出よつとする。

パンツ！

「！？」

「 「 「 見つけたぞ。」 」 」

- えー! ?

モリモリノリ強引に響かれて、口達林云ひ林谷

「告辭」

「なんですか一体！？」

響はバ一ツケだつた。

卷之二

「警」
「官」

「響ちゃん、華陽で働かない？」

- えー！？

「やつらの事か。」

「はじめられたぜ。」

「...回りくま。」

「えつ...」

3杯 アルバイト決定? 2

「えつ……私がですか?無理ですよ……。」

「大丈夫だよ、皆教えてくれるし」 一ノッ

「……えつでも……。」

「やればいいだろ?」

「えつ?…。」

「やつていいとおもうよ、俺も教えるしー」 一ノッ

「……同じく。」

「!?!?……あつじゅあ……よろしくお願ひします。」

「うん!~よろしくね、響ちゃん」 一ノッ

響は”華陽”で働く事になつた。

「あつ、改めて、麗亜響です!よろしくお願ひします。」

「店長の、臘月露依。よろしくね」 一ノッ

「天城雲よろしくな!」 一ノッ

「まつだひき

「松田飛樹」。

「まつだひき

「鬼河臨よろしく頼む!」

「おにかわりん

「今日から、入れる?」

「一応……」

響は不安だったが、楽しさといつ気持ちもあつた。

「だけど、店長、制服なくないか?」

「それがあるんだよねえ~」 一ノッ

「マジか!」

「お前の反応は面白いな、雲。」

「……まったく笑つてないけど……。」

「はいはい、この二人トリオは置いてといて、着替えてきてくれるかな?」 一ノッ

「分かりました…。」

響は奥の部屋にあるカーテンで着替えた。

「……頑張りないと…。」

タツ

「お…お待たせしました。」

「…?…。」

「うわあ…。」

「なつ…。」

「…。」

「そんなに、見られると困るんですけど…。」

4人とも、顔を真っ赤にしていた。

飛樹はちょっと頬を赤めだつた。

「響ちゃん、可愛いね！よく似合つてるよ」――「」

「なつ…。」

ボンッ…

響は顔を真っ赤にして、頭から湯気が出る。

「店長、いじめないでくださいよ。」

「露依さんの癖。」

「…マジない。」

「じゃあ、接客とかできるかな？」

「…一応出来ると思います！…」

「そつか、じつもいろいろサポートするから、大丈夫だよ」――「」

「あ…ありがとうございます…。」

「ドキッ！

何でこんなに可愛いんだ！

「…響ちゃん…。」

「はい？」

「…敬語じゃなくていいし、君付けとかいらない。」

「あつうん、じゃあ飛樹って呼べばいいよね」――口芝

「…うん。」

「じゃあ、私も響でいいよ」――口芝

「…分かった。」

「じゃあ、店開けるよお～」

そして、店は開いた。

「いらっしゃませ」――口芝

だけど、ここのかつらは女性が多い。
まして常連さんは皆店員田端で来てる感じ。
そして、響は嫌な田端で見られている。

「何へあの子、バイクの子へ。」

「え？ も、あの子も店員田端になんでしょうへ。」

「……。」

女性の客が響の田端の前でコソコソ話す。
ガタッ

「ねえ、あなたさ、じつはこの店員田端に入っちゃったんでしょ？
ねえ、どうなのーー。」

「……？ ……やあー。」

響が耳を塞いで田端をつぶる。

「何びびった不利してんだよーー。」

客が響の手をつかむ。

「ーーー。」

パシッ！

「…？」

「…」の、店長の友人の娘なの、だからあんまり手を出さないで。

「…？」飛樹…。」

飛樹が響を助けた。

「…飛樹君がそう言うなら本当なんだろうね、悪かったわ。」

「…あっいえ…。」

「…大丈夫？」

「えつ！？…あつはい！」ニコツ

「…そつか…。」

そして、初日のバイトは終わった。

「でわ、お疲れ様でした」ニコツ

響はバイトが終わり挨拶をして帰った。

「…響、僕が客から助けたとき体が震えてた。」

「…そつか…。」

「それなら、前学校で音がしただけなのに、驚いてたな。」

「おかしいなつて、敏感なのか？」

「まあ、どうだらうね…。」

ガチャッ

「…ただいま…。」

「帰つてくるのが遅い…！…！」

「…？」ごめんなさい…。「めんなさい…。」

バシツ！バシツ！ドンツ！

私に幸せなんて来るの?..。

「お前はこつもこつも……」

「バシッ！パンッ！」

「『めんなさい…お父さん』『めんなさい…』」

「「つむせ」……」

「パソンシ……」

「お前は俺の『う事だけを聞いていればいいんだ！…』

ガチャッ

「…痛…。」

響は肩から血が出ていた。

さつき父親がガラスを肩に刺したのだった。

ポタンッ

「…我慢すればいい…」のままでいい…。」

響は泣きながら自分の手当てをしていた。

私が我慢すれば、家族の中はちゃんと行く…大丈夫。

「う…『めんなさい…』」

「麗亜？その傷どうかしたの？」

「ああ…ちょっと、けちやつてそのままわれりやつて」二コシ

「麗亜はデジだねー今度からは『氣をつけない』といけなによ。」

「うんー」二コシ

響は自分の包帯を巻いている肩を見た。

「はあ～。」

そして、放課後。

「 そうだ、バイト。」

響は左フエに向かつた。

「いんこちわー！ 頂さん！」

「おお、今日またまた、おへこみ鑑定士、おお」

「あつうーー！」 開店する

「お前ら仲良くなつたな。」

「本當だな。

「響ちゃん、その包帯どうしたの？」

「はい！」

響はバイトの服に着替える。

そして、着替えているときに響の携帯がなつた。

「醫學上之問題？」

「あつ 置いといて下れ。」

「だけど、お父ちゃんからだよ？」

！？ 大丈夫です。後で電話しなおしますから。

「やう? なれいいかど

後で…電話すれば大丈夫だよね？…。

ガラッ

「じゃあ、皆今日も頑張つてね」――口シ

カラソツ

「こりひしゃいませー。」――口シ

大丈夫、後で電話すれば……。

「響ちゃん、休憩10分ね、お腹すいてない？」

「えつ……少々……。」

「じゃあ、雲、後は三人でやつとくから、休憩入つて。」――口シ

「了解つす。響。」

響と雲は奥の部屋で休憩を取る。

「ケーキと紅茶でいいか？」「

「あつうんー。」――口ツ

「了解。

響は自分の携帯を見た。

「！？。」

着信がすべて、父親だった。

そして、電話が鳴った。

「！？あつはいもしもし？。」

響は出た。

「響か？今どこに居るんだ？」

「あつ……お父さん？今……ちょっと。」

「どうかしたのか？」

「私ね、バイト始めたんだ、お父さんここに言つての忘れただ『めんなさい』。

「そりか、バイトを始めたか、なり毎日帰つてくるのが遅くなるな。

「うん、『めんなさい』。」

電話をしているときに靈がケーキと紅茶を持ってきた。

「お父さん、今日ケーキ持つて帰つて来るね」二口ツ

「あつ、じゃあ楽しみに待つてるよ」二口ツ

「うん、バイバイ。」

そして、電話は切れた。

「親からか?」

「はい!」二口ツ

「そりが、早く食べようぜ。」二口ツ

「はい!」二口ツ

なんだ、虐待じやなかつたなら…良かつた。

「…おいしいですー」二口ツ

私は”幸せ”ではないと自分自身で思つ…。

5杯 本心正直 2

ガチャッ

「お父さん、ただいま」二口ツ

「おかえり、響！」

バシッ！

「！？。」

グイッ！

帰つてきて早々、頬を殴られる。
手を引っ張られる。

「お前はもう、要らない！死ね！」

「！？。」

そして、父親は風呂場に来る。

そして、響の頭を持つて、つつじむ。

「！？ グッ！？。」

響は溺れていた。

バシャッ！

「…ゲホッ！ ゲホッ！ …う！」

「死ね！ お前なんか死ねば良い！俺の許可なくバイトをするな…！」

「ゲホッ …ごめん…なさい… ゲホッ！ グッ！」

「口答えをするな！」

「ハア…ハア…ゲホッ。」

響は風呂場で倒れていた。

服はビショビショ、体や顔に傷や血が出ていた。

「…う…。」 グズッ

響は涙を流した。

怖い！…痛い！…苦しい！…違つ！…。

何を怖がるの？

分からない。

父親が怖いの？

違う！

痛い？父親に暴力を振られて？

違う！

苦しい？父親が狂つてしまつて？

違う！違つ！やめて！

父親も狂つてるけど、あんたも狂つてしまつている。
！？。

ハツ！！

「！？…ゲホツ！…ゲホツ！…。」

響はビショビショのまま、部屋に行く。

そして、服を着替える。

「……。」

そして、傷を手当てをする。

「お父さん、どこのに行つたんだろ？」「

響が風呂場に居る間、父親は居なくなつていた。

「…お父さん…。

そして、響の携帯が鳴る。

「ん？…はい？」

「あつ、響ちゃん？今大丈夫？」

「あつ、店長！はい、大丈夫です！」

「今、響ちゃんの家の下にいるんだけど？」

「え？ 家の下ですか？…」

響は部屋の窓から外ののぞくと、露依が響に手を振る。

「今から会える?」

「あつ……『めんなれ』。今田はちよつと……」

卷之三

二十一

「豊かさは？」

「あら……えつと……。」

卷之三

「そつか、じゃあすぐ下に来れる?」

「せこ！」――
ハシ

響は準備をした、そして家の鍵を閉めて、店長達と出かけた。

父親が帰ってきて、家を散らかし暴れていた。

「お前は一生俺の物だ。」

”「めんなさい。」…私はあなたと話す事がとても怖くなりました。

だから、私は…”妖怪”と暮らす事にします。

サヨナラ…。

「響ちゃん、盛り上がりてる?..?

「はい!…」ニコッ

カフェの階でカラオケにきていた。

店長はもつつかり、テンションあげあげ。

「……。」

響は携帯を見る。

着信なし、受信もなし…かあ…。まだ帰っていないのかな?

「響、お前歌わないので?」

「えつ? 雪君が歌つていいよ」ニコシ

「俺はいいの、お前歌えよ。」

「…歌えるかな?」

「大丈夫だよ。」

響はマイクを渡され、ステージに立つ。

「…見つめてる、君の顔を。恋しきやつた私だもん。」

ドキッ!…!

男子全員、頬を赤く染める。

歌ひますぞじやんか。」

「...回、」

「べ。別に俺はうまいとか思ってないしなーーー！」

一
はいはい

そして、響の携帯がなつた。

「すみません。」

響は部屋から出て、電話に出る。

גָּמְנִי

「！？
お父さん。
」

「早く帰つて來い！！！お前は俺なしじゃ生きていけない！帰つて
きたら罰だ！」ブチツ！

力タツ

響は携帯を落とした。

カラソニツ

「響ちゃん？」

怖い！ 殺される！ 恐怖い！！！

「響？」

響の体は震えていた。

「…あつ…私、もう帰ります!。ありがとうございます!」やがておしゃった。

バシツ！

「！？」
飛樹、離して私帰る。

「怖いなら帰らなくても良い。」

「…？」

「…そんなに体を震わせて怖いんだろう？」

「…？…怖くなんか…ないもん。」

「…。」

「私は…強いもん…。」

怖い！

「…そんな、泣きそうな顔でよくそんな言葉がいえたな。」

「？！」

「助けてほしいなら言えよ！響…」

「！？…。」

「お前がどうしてもつて言つなら、助けてやるよ…。」

「…？…う…。」

「響ちゃんは一人じゃないよ」二口ツ

「う…う…怖い…一人じゃ不安で…だけど…そんな事を思つてる
ととても辛い…。」

響は泣きながら自分の本音を話す。

「助けてほし…う…助けて…う私は死にたくない…。」グズ

「…僕が守るよ。」

飛樹は優しく響を抱きしめた。

「！？…。」

「行きますか？」

「そうだな！」

「…久々。」

「皆、なまつてないよね？」「

「あつたり前！」

「？…。」

ガチャツ

「…ただいま。」

「響！…！…！」

「…？…。」

「来い！」

「？！…。」

バシツ！ドンツ！ガシャンツ！バチーンツ！ダンツ！…

「…「めんなさい！…！」

「許されると思つてゐるのか…！」

「本当にお前は…！…！」

父親がとても暑いお湯を持つ。

「…？…嫌…嫌…嫌…！」

バシャンツ！…

「？！…。」

「…父親が娘を虐待か。」

「…？…なんだお前ら…！…！」

「…なんだお前ら…！」

「…僕は、妖狐の飛樹。まあ、妖怪。」

「…なんだ…！」

「…はあ…人間だからってあきれるな。」

「…？…。」

父親は透明な檻に閉じ込められる。

「クソツ！出せ…！」

「…響は僕達が貰う。」

「…？…駄目だ…！」

「お父さん…。」

「…じやあなぜ、傷つける…こんな姿を見ても何も思わないのか…！」

「…俺だつてな…こんな事…したくないんだ。」

「お父さん……」めんなさい。私は、お父さんの理想の娘になれません。

私はあなたと居る事がとても怖くなりました。
だから、妖怪と暮らします……サヨナラ。」

飛樹が響を抱ぐ。

「……響……」

「……」めんなさい……」

響の瞳には、涙が溢れていた。

「飛樹、これからよろしくねー。」ニコニ

「……お前のままでいいと思つ。」

「……そつか……ありがと。」

7杯 住む家

あの日、私は家から出て行つた。

”お父さん”と言ひ存在を残して。

そして、新たに知つた事。

それは、カフエの皆が”妖怪”だと言ひ事。

そして、昨日は家を出た後、カフエに泊まりました。

そして、今日、私の住む家を決めるらしいです。

「で、どうする?」

「俺は、一人暮らしだ。」

「知つてるよ。」

「俺は、寮だぜ? 露依さん。」

「それも知つてる。」

「…両親居る。」

「それも知つてる…。」

「…」めんなさい。私のために…。」

「ああ…! 韶のせいじやないって…!…!…!

韶は不安な顔をする。

「…韶、僕の家に来る?」

「…?…。」

「そんじや、俺の家に来い。」

「学園の寮でも使えばいいだろ?」

「えつと…私、カフエで寝泊りしますよ?」

「 「 「 それは駄目……！」 「 「

「はう！……」

なぜか、4人ともカフェ寝泊りするのは全否定する。

グイッ

「 僕の家に来てよ。」

「えつ？ 飛樹？」

「 僕の家は、部屋がいっぱい余ってる。」

「 そういえば、飛樹の家は金持ちだからね」 二コツ

「 そりなんだ。」

「 飛樹、ずりいーぞ。」

「 雫の家は小さいから、やめた方がいい。」

「 なつ！ ！」

「 僕の寮は広いけど、一人部屋。まあ、僕は一人だけだ。」

そして、響の住む家は決まった。

「 いいのかな？ 本当に？」

「 両親には、もう連絡したから大丈夫。」

「 そつか…。」

道中を二人は隣あわせで歩いていた。

「 ……。」

「 韶。」

「 何？。」

「 手、繋いでいい？」

「 えつ？ うん！」 二コツ

「人は手を繋いだ。

「冷たい、人の手はこんなにも冷たいのか？。」

「それはどうだろうね」ニコッ

「…響、僕が怖い？」

「どうして？」

「あんな人間でもない僕が…。」

「…そんな事無いよ、飛樹は飛樹でしょう？私はそう思つよ」ニコッ

「…。」

グイツ！

「えつ！？。」

飛樹は響を抱きしめる。

「飛樹？…。」

「響、ありがとう。」

「…。」

タツ

「見つけた。響。」

パチツ

「ん?...」

朝、響が田を覚ます。

トンシットンシ

「はい?...」

「失礼します。響様、朝食の用意が出来ておられます。」

「あつ...はい!今...キヤア!...」

ドンシ!-

「大丈夫ですか?」

響が焦りすぎて、ベッドから落ちる。

「...はい!...」

そして、リビングに行くと、飛樹とその両親が居た。

「キヤアアアアア!...可愛い!...」

「えつ?」

「可愛い!...やあああ!...飛樹のお嫁さん?」

「えつ!?」

「母さん、響が困ってる。」

「母さん、一田落ち着こい!」

「あつ、じめんね響ひやん!」

「...はあ...」

響は椅子に座る。

「響ちゃん、普通に食べていいからね」

「ありがとう!」

「あつは」

「おいしい?」

「はー、おこしいです」

「そう?良かつた。」

「」

居なかつたな。こんな暖かい家族が。

私の家族はいつも冷たかった…。

「響、学校もう行こう。」

「あつうん！」

飛樹と響はかばんとお弁当をもって、学校に向かう。

「行つて来る。」

「行つて来ます。」

「いつてらつしゃい、二人とも」二コッ

「いつてらつしゃい響ちゃん！飛樹！」二コッ

飛樹の両親が笑顔で送つてくれた。

「飛樹の両親は優しい人だね」二コッ

「そうかな？ただちよつとウザイだけでしそう？」

「そうかな？」

タツ

「響！」

「グイッ！！」

「！？…。」

「ガシャンッ！…！」

響と飛樹の目の前に車が突つ込んできた。

「大丈夫か？響？」

そして、響を助けてくれたのは、一人の少年だった。

「えつと…ありがとうございます。」

そして、響は立ち上がる。

「響。」

「…なんで私の名前を？…。」

「覚えてないか？俺の名前は『かみよあきけい神夜咲蠻』。」

「蠻？…。」

響の目の前には響の知り合い的な感じの人だった。

「響。俺の事はいいけど。あんまり妖怪に近づかない方がいい。」

「えつ？…。」

「グイツ！」

「？！…。」

「そいつもの妖怪なんだろ？…。」

「！？…えつ？？」

「！？…。」

いきなり、飛樹の正体がばれた。

僕の正体がばれた？…。

ドクンッ！

「！？…。」

響、俺は。

＜ありがとう、蠻お兄ちゃん！＞――コラ

「蠻…お兄ちゃん…。」

「響、思い出したのか？」

「誰だ？…。」

「俺は、陰陽師。陰陽師の神夜咲蠻だ―」

「！？…。」

陰陽師

！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3809z/>

妖カフェ

2011年12月17日19時49分発行